

新名護博物館（仮称） 基本構想（案）



博物館は未来にむかう

平成21年3月

新名護博物館（仮称）
基本構想策定検討委員会



目次

新名護博物館(仮称)基本構想(案)

I 本編

1. はじめに	2
2. 新名護博物館建設の意義と目的	3
3. 基本理念	5
4. 基本テーマ	6
5. 博物館の基本的活動	10
① 資料収集・保存	
② 調査研究	
③ 展示	
④ 教育普及	
⑤ 地域連携	
6. 管理運営	17
7. 施設	19
8. 事業推進スケジュール	23

II 資料編

1. これまでの経緯	26
2. 名護博物館の活動	29
3. 市民アンケート	36
4. 検討委員会の記録	37
5. 作業部会の記録	48

挨拶

名護市教育委員会
教育長 比嘉恵一

■ 新館建設の意義

博物館は未来にむかう

人間はつねに、自分の存在を確かめずにはいられない動物です。ふとした時に立ち止まり、昨日までの自分を確認しては明日に備えます。過去から未来に続く時間の中に、自分や家族、故郷へのつながりを見だし、懐かしさや安らぎ、誇りを覚えるのは、ごく普通の感情だといえるでしょう。

それを最も分かりやすく示してくれる場所が博物館です。

博物館は、いつでも立ち戻ることができる過去を教えてくれる空間であり、先人たちの知恵や生き方から、一人ひとりが未来を考えることができる場所だといえます。

深い山と稲作を大きな特徴としてきた、名護・やんばるの人々のくらしには、豊かな自然環境と共生するための知恵と工夫があふれています。それは、現在の私たちが顧みなくなったものですが、現代社会が直面している環境や安全、教育におけるさまざまな問題を考える上で、貴重な手がかりを数多く秘めているといえます。

名護・やんばるのくらしと文化を、保存・継承していくことの必要性がそこにあります。ものを単に並べるだけでなく、実際の道具を使った体験や学習を通して、地域の文化資源を次世代に受け継がせる博物館の取り組みが、明るい地域づくりの一步となるのです。

博物館は地域社会とともにあり、人々との交流のなかでともに成長していく機関です。さまざまな活動を実践していく場であり、人々の出会いがさらなる発展を生み出す、創造の場でもあります。

そのためにも、機能や体制を現在よりも充実させた、新しい名護市立博物館が必要だと考えます。



■ 新館建設の目的

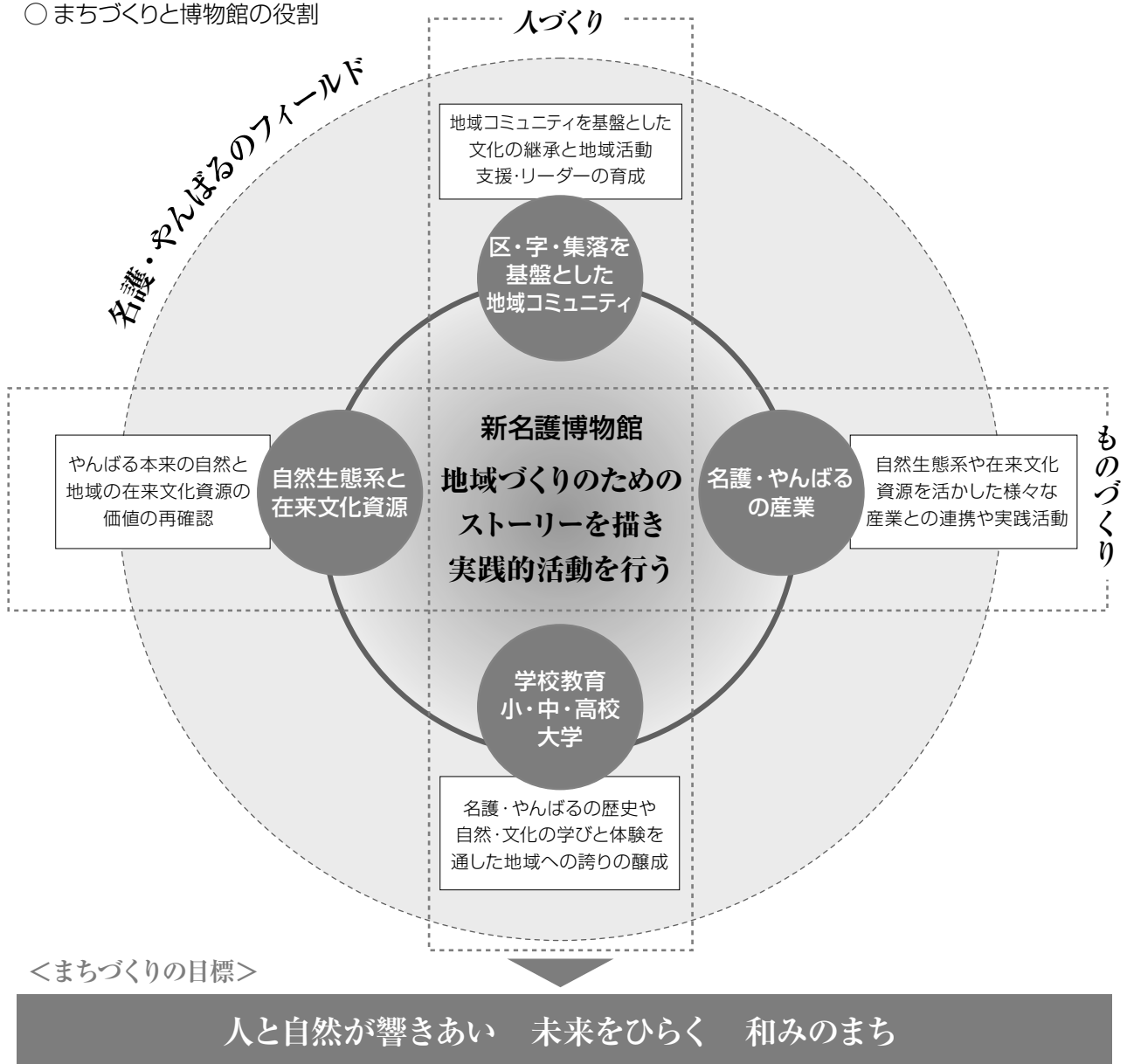
まちづくりのための実践的な活動を、市民とともに

長い年月を経て受け継がれてきた区や字単位の地域コミュニティが、今も生活の基盤としてのこる名護・やんばるにおける新しい博物館は、学校教育や社会教育とも連携した「人づくり」を大切にします。

また、地域にのこる豊かな自然や、伝統文化などを“在来地域資源”として評価し、「ものづくり」にいかすことも大きな柱と考えます。

「人づくり」と「ものづくり」の交わる場所で、未来をひらく創造の芽を育てることが、新名護博物館(仮称)の目的といえます。

○ まちづくりと博物館の役割



■ 新名護博物館（仮称）を支える 6 つの柱

● 名護・やんばるのくらしと自然を表現する博物館

新名護博物館（仮称）は、名護・やんばるの要として、奄美もふくめたやんばるのくらしを表現する地域総合博物館です。フィールド全域を博物館としてとらえる視点を持ちながら、地域の人々とともに考え、行動する博物館活動を展開します。

● 過去と未来のくらしを考える博物館

新名護博物館（仮称）は、地域のかつての姿やのこされたものから社会やくらしを考え、未来を思い描くきっかけを提供する場所です。過去に学びながら、私たちが向かうべき方向をともに考えます。

● みんなでつくる博物館

新名護博物館（仮称）は、地域にひらかれた拠点としてこれからも活動します。誰もが豊かな文化にふれ、学ぶと同時に提供する立場にもなる“ぶりでい（みんなの手）”精神を受け継ぎながら、人々が活発に交流できる場所となることを目指します。

● あつめ・考え・守り育てる博物館

新名護博物館（仮称）は、資料の収集整理・調査研究・教育普及を基礎に活動します。それぞれは高い専門性を持つと同時に、協力しながら在来文化資源の保護・活用、人々の表現活動支援などを行います。外部組織との連携や関係強化も推進します。

● 名護・やんばるの情報をつたえる博物館

新名護博物館（仮称）は、博物館ならではの視点に立って地域の情報を蓄積するとともに、さまざまな形の情報発信に取り組みます。博物館活動の広報や紹介だけでなく、名護・やんばるの自然・文化の情報に関する、幅広い利用者ニーズに応えます。

● 夢がひろがる博物館

新名護博物館（仮称）は、地域に根差しながら世界を見つめる目を育みます。地域の歴史・文化に、自己とのつながりや誇りを見いだす時、世界や未来に立ち向かう勇気や夢を、子供たちは獲得するので、積極的な事業展開をすすめ、希望にあふれた博物館になることを目指します。

■ 基本テーマ

名護・やんばるのくらしと自然

名護・やんばるの人々は、自然の厳しさ・やさしさに向き合ってきたからこそ、先人の教えや知恵を敬い、地域のつながりを今も大切にしているといえるでしょう。在来資源をたくみに取り入れた農業や漁業、ものづくり、伝統行事などにも、そのわざや思いは反映されています。

新名護博物館（仮称）は、やんばるのくらしと自然に根ざした活動を展開しながら、地域資源を活かしたあらたな価値の創造を支援します。

■ テーマ展開の視点

やんばる本来の自然生態系の再生

傷つけられた現在の自然を、多様性に満ちた生態系にもどすことは、単に景観をよくするだけではなく、環境に配慮したこれからのくらしや、ものづくりを考える上でも有効な財産となります。

在来文化資源を活かした、やんばる型農業の創造

在来文化資源を活かした複合型の農業経営は、「やんばる型農業」を創造する基本であり、循環型社会を予測するものです。自然との共生を視野に入れた博物館活動を展開します。

伝統行事の保存・継承とあらたな交流

「村遊び」に代表される地域の伝統行事を保存・継承するためにも、博物館をとおした行事の紹介や公開・公演を積極的にすすめ、あらたな交流や広がりを獲得します。

集落の成り立ち、村（ムラ）の歩みの継承

集落単位で推移してきた名護・やんばるの歴史は、現在も字のくらしに受け継がれています。博物館は地域の一人ひとりがアイデンティティを自覚し、未来を考える場となります。

くらしの知恵・わざ・心を、体感・実践する

地域につたえられた知恵やわざには、現代につうじる普遍性があります。博物館では実践的な活動のなかからその価値を見直し、あらたな発見や創造をとおしてものづくりを支援します。

先人たちが遺した文化資産の保存・活用

名護ゆかりの人物に関する資料群や美術工芸作品を収集・研究し、活用をはかることは、地域の人々の自信や誇り、人材育成につながるものです。

山

山とくらし
貝塚・遺跡／炭焼／薪／イノシシ／猪垣／パイン／

山の生態系
嘉津宇岳／安和岳／八重岳／名護岳／久志岳／多野岳／大湿帯／地質・岩石／褶曲

集落

川・農地・御嶽

集落とくらし
貝塚・遺跡／グシク／間切とムラの変遷／行政組織と役職／久護家／稲作・畑作／家畜／藍／染織／村踊・組踊／行事／桜祭り／学校／セメント瓦／酒造／道

集落の生態系
御嶽林／屋敷林／水田／畑／ガジュマル／アコウ／

海

海とくらし
貝塚・遺跡／沿岸の小地名／糸満売り／漁労(ピトゥ・捕鯨)／塩田／海運／山原船

海・川の生態系
イノー／羽地内海／名護湾／大浦湾／マングローブ林／屋部川／羽地大川／源河川／幸地川／大浦川／轟の滝／リュウキュウアユ／

水源

御嶽

クサテ森

川

水田

畑

集落

防潮林

墓地

リーフ(ビシ)

イノー

水源地

■フィールド・ミュージアムの視点

名護・やんばるにのこされた自然と文化は、豊かな地域資源であり、未来を創造する際に役立つヒントや材料があふれた「宝もの」だといえます。

地域全域を博物館に見立てるフィールド・ミュージアムは、市民が主体となって地域を掘り起こし、先人たちの遺産を見つけることに他なりません。

字・集落単位で人・もの・情報をむすぶ

字（あざ）単位で受け継がれてきた祭祀や伝統行事は、保存・継承の必要性が高いものだと思います。地域の人々との十分な話し合いにもとづく調査・研究や、公演の企画など、あらたな展開も考慮に入れた取り組みが求められます。



フィールドに実践活動の場を持つ

野山を博物館の屋外展示に見立てるフィールド・ミュージアムでは、農業体験や動植物観察、環境調査、地理学習など、現場の特徴をいかした個性的な体験学習が可能です。利用者に応じた多彩なプログラムを展開するためにも、地域との連携が不可欠です。



新名護博物館
地域力を向上させる
ネットワーク拠点

在来の地域資源をいかす

在来種に対する評価の高まりは、安全や地域性といった価値が見直された結果です。在来地域資源に対する研究を、地域再生のために役立てることも博物館活動のひとつでしょう。また、フィールドを使った子供たちと動植物とのふれあいは、「命を学ぶ場」としても重要です。



“やんばる型”の ライフスタイルを発信する

自然との共生をベースに、温かな人間関係に支えられたくらしは、“やんばる型”とも呼べるライフスタイルであり、都市部の人々が憧れる魅力をもっています。個性的な価値観のひとつとして情報発信をおこない、やんばるファンの開拓やリピーター獲得につながる効果もあります。



① 資料収集・保存

■ 基本的な考え方

出かけ、集め、整理する

計画的な収集と、活用するための保存

博物館の資料収集・保存活動では、将来的な活用を想定し、目的をもった適切な計画と継続的な取り組みが必要となります。単なるものの受け入れにとどまらず、そこに付随する情報を同時に収集するためにも、普段からの交流で地域との信頼関係を築いておくことが重要です。

資料の保管機能には、常に安定した環境を保つ施設設備が不可欠ですが、展示との連携を考慮した、安全かつ効率的な資料の出し入れを可能にするシステムや、外部からの利用に対応する柔軟な発想と体制も検討します。集め、ながめるだけでなく、教育や市民利用を想定した機能や取り組みが求められていると考えます。

■ 展開事例

- 名護・やんばる全域を視野に入れた、資料収集活動。
- 資料収集に対する市民の理解・協力を得るための、積極的な広報活動。
- 歴史・民俗分野の近現代資料、および植物関係資料の収集・保存。
- 写真資料の整理とデータベース化。
- 祭祀・行事・戦争証言・民話・島クトゥバなど、無形文化財やオーラルヒストリー等の記録映像・音声資料の調査・収集と既存資料のデータベース化。
- 程順則をはじめとする、名護ゆかりの人物に関する資料や、美術工芸品の収集・保存。
- 他の部署との連携強化による、行政内部の資料収集・保存。
- 現在の収蔵庫の継続的な活用。

■ 施設構成・設備計画への留意点

- 収蔵庫見学や資料整理、修復作業などへの市民参加など、新しいニーズへの対応。
- 貴重な文献資料、美術工芸作品の保存に対応した機能をもつ収蔵庫の設置。
- 新しく収集する資料にも対応できる収蔵スペースの確保。

② 調査・研究

■ 基本的な考え方

みんなで知る喜び

幅広く人材・組織をコーディネートする調査・研究体制

博物館がおこなう調査・研究は、すべての活動の基礎となるものです。その成果を展示し、教育普及活動に役立てるためには、外部の専門家・研究機関などとの連携が不可欠であり、高い専門性に加えて、広い視野をもった柔軟な対応が学芸員には求められます。

また、たとえば、専門的な知識をもった市民や教育関係者に、“市民学芸員”などの名称で博物館活動をサポートしてもらうような、しくみを取り入れる必要があります。それは、調査・研究活動に対する市民の理解を広げ、研究の質をいっそう高めることにもつながります。

そのためにも、これまで蓄積してきた資料のデータベース化と、積極的な公開を継続的におこなうことが重要だと考えます。

■ 展開事例

- やんばる全域を視野に入れた調査・研究活動。県内外の専門家・研究機関とのネットワーク構築。
- 学校や公民館を拠点とする、市民と連携した調査・研究活動。
- 地学・天文・植物・考古・無形民俗・年中行事・環境などの分野に関する調査・研究活動。
- 関連する他の部署との連携強化。
- これまでの調査・研究資料のデータベース化と公開。

■ 施設構成・設備計画への留意点

- やんばるにおける調査・研究をサポートする施設・環境の設置（研究室・会議室・研究備品等）。
- 県内外の専門家・研究機関・市民などとの連携を活発化する場や情報ツールの整備。

③ 展示

■ 基本的な考え方

出会いと発見

くらしと自然のつながりを発見する展示

新名護博物館（仮称）は、名護・やんばるのくらしを表現する総合博物館として、人と自然のかかわりを総合的にとらえる展示を展開します。

また、字単位の情報や村踊りなど、地域に根ざした展示や情報受発信をおこなうことで、市民にとって「自分たちの施設」であることが実感できる活動を充実させます。

名護市域だけではなく、やんばる全域のガイダンス機能を担うことで、各地の博物館やフィールドへ利用者を誘う役割も高めます。

■ 展開事例

- 常設展示・企画展示・ギャラリーと屋外展示やフィールドの関連性を活かした展示。
- ハンズ・オン（ふれる）展示に、あらたな工夫を加えより興味・関心を高める展示。
- 民具や、自然資料を活かした、くらしと自然の関連性を実感できる展示。
- 村落の起源と変遷を軸足にして、名護・やんばるの歴史や文化を語る展示。
- 名護にゆかりがあり、市民によく知られる歴史上の人物（程順則・徳田球一・宮城与徳・宮城真治など）にスポットをあてた展示。
- 地域のきずなが今も生きづいている「村踊り」に関する展示や、練習や実演ができる活動の場を設置。
- 企画展示室・ギャラリーを充実させ、市民の文化活動支援を強化。
- 教育普及事業との連携を考慮した屋外での展示。
- 癒しや心地よい雰囲気を演出する屋外・半屋外の展示。
- 種の保存についての意義と理解を深める、在来動植物の飼育や民俗植生展示。

■ 施設構成・設備計画への留意点

- 開放的で個性的な、現在の名護博物館の雰囲気を継承。
- 貴重な美術工芸作品や資料の展示が可能となる展示ケース・什器の設置。
- 無形文化財の展示やフィールド活動の展示方法として、映像・情報機器の効果的な活用を検討。
- バリアフリーの観点から、身障者や高齢者、妊産婦、乳幼児などへの対応を考慮。

④ 教育普及

■ 教育普及機能の基本的な考え方

みんなで遊び、みんなで学ぶ

地域への誇りを育む、学校教育との連携強化

資料の収集保存・調査研究・展示という博物館活動の成果を、より分かりやすい形で示すことが、教育普及の役割といえます。

これまで以上に学校教育との連携を強化し、課外学習や授業プログラムとの連携など、市内全域の児童・生徒の体験的な学びの場として、博物館活動を充実させるための施設設備や活動内容を充実させます。

生涯学習や体験学習などに対する要求が高まる今日、子供たちや地域住民が気軽に足を運び、楽しみながら学べるような教育普及活動を目指します。

■ 展開事例

- 「ぶりでい子ども博物館」を引き継ぐ体験学習、生涯学習。
- 博物館資料の貸し出しやスタッフ派遣などによる、学校教育関係者との密接な交流。
- 市民を対象とした自然観察会、街歩きなどの実施。
- 市民が自由に出入りでき、お年寄りと子供たちが一緒にふれあえるような場の設置と活動。
- 琉球犬などの、身近な在来家畜と子供たちとのふれあいを支援。
- 在来種の栽培、収穫から調理までを体験する「伝統料理教室」などの企画。
- 地元の職人技術の保存継承を目的とする、伝統的な手仕事の再現や実演、展示・販売などの企画。
- 名護城東側の“せせらぎ広場”に設置される水田、ビオトープを活用した自然観察会、農業体験の企画。
- “景観教材地”などの名称による、フィールド空間の指定や保存、利活用の検討。

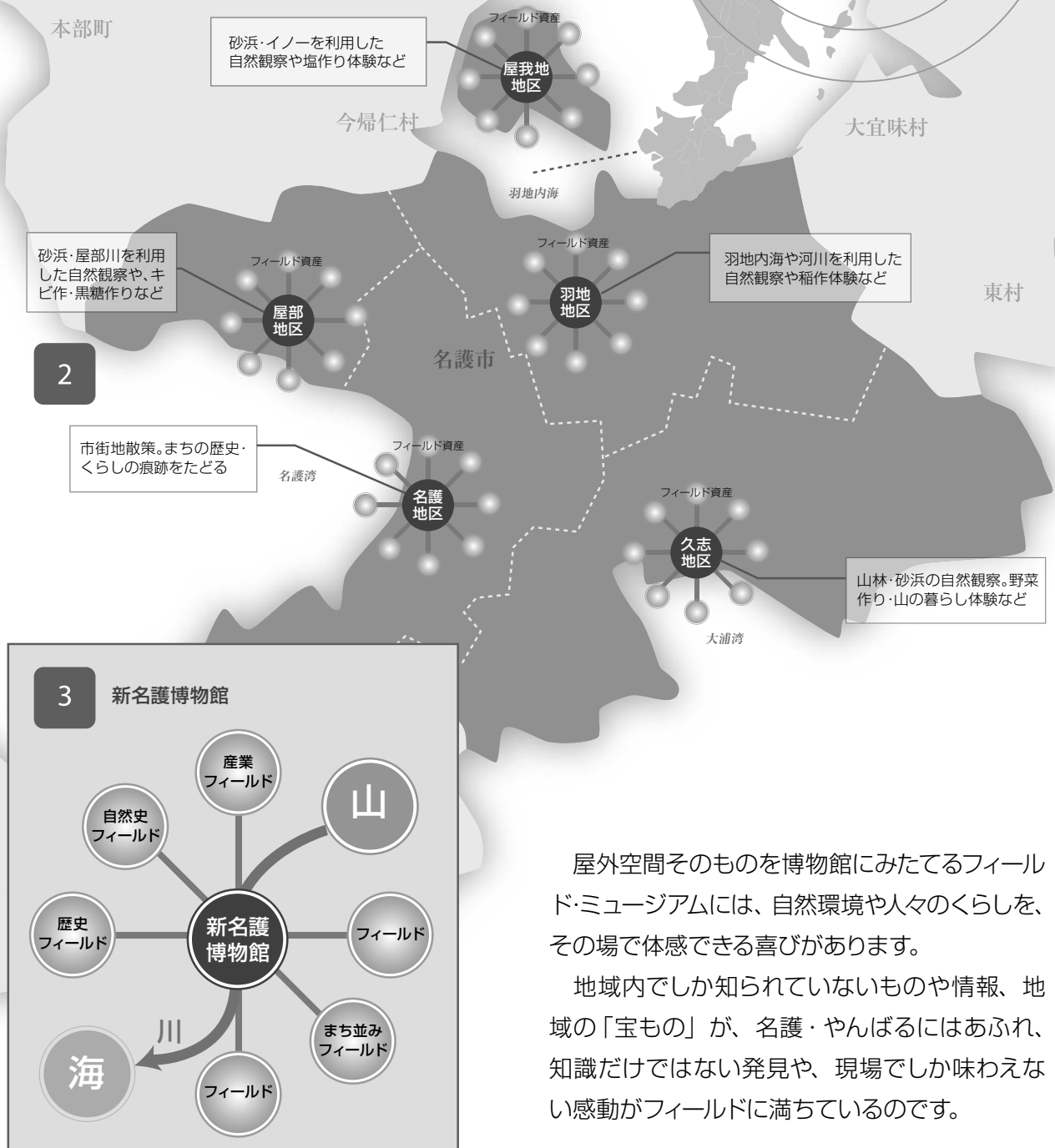
■ 施設構成・設備計画への留意点

- 駐車場や博物館専用大型バスなど、名護・やんばる全域を対象とした児童・生徒の学習利用を積極的に推進するための安全な移動手段の確保。
- 館内、フィールドにおける解説員やガイドの確保・養成と活動の場の確保。
- 体験的な活動を展開する施設や道具・仕掛け・プログラムなどの開発。

⑤ 地域連携

■ 新名護博物館(仮称)を中心に広がる3つのフィールド

- 1 名護・やんばる地域の総合ガイダンス拠点
- 2 名護市域各地区の活動ネットワーク拠点
- 3 新名護博物館・周辺エリアの交流・にぎわい拠点



屋外空間そのものを博物館にみたてるフィールド・ミュージアムには、自然環境や人々のくらしを、その場で体感できる喜びがあります。

地域内でしか知られていないものや情報、地域の「宝もの」が、名護・やんばるにはあふれ、知識だけではない発見や、現場でしか味わえない感動がフィールドに満ちています。

⑤ 地域連携

■ 名護市域の自然・文化資源イメージマップ

屋部地区

<地区の特徴>

名護岳から流れる東屋部川と、嘉津宇岳に発する西屋部川が、河口付近で合流して名護湾に注ぐ。南側河口の宇茂佐古島遺跡では、独特の畑跡や高麗系瓦が多数出土して注目された。土地の多くは山林で、製茶、藍の製造などがおこなわれていた。山原船が往き来する屋部川の周辺の低地には、水田が広がっていた。伝統的な建築様式を今に残す久護家は、部落の名前になったほどの豪農。屋敷を取り囲む防護林が、今も美しい景観を形作っている。

<主要なフィールド資産>

●自然資産

嘉津宇岳／安和岳／屋部川／ヤギ／シークウーサー／コノハチョウ／フタオチョウ／

●文化資産

宇茂佐古島遺跡／屋部の久護家／久護家の墓碑／安和のくばのうたき／八月踊り／安和のウシデー／屋部寺／水明橋／藍／



名護地区

<地区の特徴>

集落は名護グスクから移動し、現在の町を形作ったとされる。現在の名護博物館は、近世期にあった間切番所の跡地にあり、フクギの巨木もそのころから残る。近世沖縄の代表的な人物、程順則は名護間切総地頭職。近代には、山原の行政・運輸交通・教育・商業機能が名護マチに集中するようになり、今日に続いている。

<主要なフィールド資産>

●自然資産

名護湾／部瀬名崎／名護岳／轟の滝／幸地川／名護番所跡のフクギ群／ひんぷんガジュマル／イボイモリ／

●文化資産

溝原貝塚／名護城／湖辺底／許田の手水／三府龍脈碑記／幸喜の柳／徳田球一記念碑／浦々の碑／白い煙と黒い煙／幸地又のハル石／津嘉山酒造／黒岩恒／護佐喜宮／大兼久節の碑／三中健児之塔／



屋我地地区

<地区の特徴>

南西側は今帰仁村湧川に向かい合い、北側は古宇利島、東側は奥武島とそれぞれ結ばれる。名護市でもっとも古い墨屋原遺跡や大堂原貝塚、県指定史跡の運天原サバヤ貝塚などが点在。羽地内海に面する南東部は、マングローブ林が広がる干潟になっていて、戦後まで製塩が行われていた。今帰仁村との間のワルミ海峡に、近年架橋工事が進む。

<主要なフィールド資産>

●自然資産

羽地内海／屋我地島／奥武島／ワルミ海峡／済井出のアコウ／ヒルギ林／屋我地小学校のアコウ／鳥獣保護区／愛楽園のアダン群落／

●文化資産

オランダ墓／屋我地大橋／大堂原遺跡／運天原サバヤ貝塚／屋我グスク遺跡群／屋我ノ口辞令書／我部の塩田／沖縄愛楽園／希望と自信の鐘／



羽地地区

<地区の特徴>

古琉球の時代、羽地内海一帯は親川グスクを拠点にした羽地按司が支配。羽地間切となった近世期、羽地内海にそそぐ大川で、蔡温の大改修工事が行われた。羽地一帯は、羽地ターブックゥーに代表される稲作地帯として知られ、仲尾次や真喜屋方面にも水田が広がっていた。明治後半からは海外移民や日本本土への出稼ぎを多く出し、その数は県内一だったとされる。

<主要なフィールド資産>

●自然資産

羽地内海／羽地大川／奈佐田川／源河川／リュウキュウアユ／

●文化資産

親川グシク／改決羽地川碑記／古我知焼窯跡／羽地間切番所跡／親川グシク／勘手納港／我部祖河の高倉／羽地ターブックゥー／源河の長者の大王／仲尾次豊年踊（碑）／源河節／



久志地区

<地区の特徴>

背後に山が連なる地形のため、交通が不便だった集落が多く、かつては大浦湾・太平洋岸沿いの交流・交易主流。戦前までの産業は山仕事で、大浦川や汀間川などの河口から切り出された薪炭が、山原船で首里・那覇などに運ばれた。川沿いの土地では稲作中心の農業が行われていたが、1960年代からサトウキビ・パイナップルに切り替えられた。伝統行事・芸能も色濃く残り、「久志の若按司」や「人形踊り」「フェーヌシマ」などが知られる。

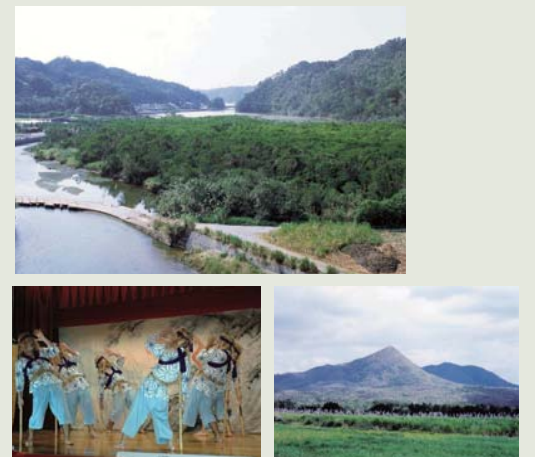
<主要なフィールド資産>

●自然資産

大浦湾／大浦川／汀間川／マングローブ林／天仁屋川／有津川／バン崎／底仁屋の褶曲／底仁屋の御神松／ウミガメ／大浦のイチョウ／瀬嵩のウラジロガシ／

●文化資産

久志の若按司の墓／久志の観音堂／瀬嵩さんたち原のハル石／辺野古の一里塚／久志貝塚／「久志の若按司」／「フェーヌシマ」／天仁屋原遺跡／天仁屋バンサチの火立跡／「二見情話」／聖火宿泊記念碑／



■ 管理運営の基本的な考え方

市民一人ひとりが、志をもち寄って

新名護博物館（仮称）では、市民一人ひとりの志が、“わが町の博物館”を支える原動力になると考えます。名護・やんばる全域を視野に入れ、フィールド活動を重視した展開をめざすには、多くの人々の理解と協力が不可欠だからです。そこで生みだされた出会いと活力は、博物館の管理運営に反映されるものであり、支え合う社会を実現するためにも有意義だと考えます。

また、管理運営は利用者の視点に立つことを基本にします。名護市民をはじめ、県内外から訪れた利用者が名護・やんばるの魅力にふれ、発見と感動を得られるような、活動の場を提供することが博物館の役割だと考えます。

■ 管理運営計画への視点

<市民参加>

● ひらかれた運営のしくみ

これからの博物館活動にとって市民参加は不可欠です。博物館協議会の設置など、地域の人々が参画できるひらかれた仕組みが必要です。また、効率的な事業運営のノウハウをもつ、民間からの人材起用なども考慮しながら、安定的な博物館運営を目指します。

● 博物館友の会やボランティア組織の活用

博物館活動を支えてきた「友の会」活動の継承発展や、フィールドにおける展開を実践するための活動組織づくりを検討するとともに、展示解説や各種事業などに関わる人材の育成、体制づくりを推進します。

<外部連携>

● 博物館、専門研究機関との連携

北部にある各博物館との協力体制の構築を推進します。県内外の類似施設・専門研究機関とも情報交換や連携を深めます。

● 学校教育との連携

新名護博物館（仮称）では、社会教育機関としての機能を十分に発揮するとともに、生涯学習活動や学校教育との連携を目指します。そのため、専門的な知識をもつスタッフの配置や、プログラム開発、交通機関の確保、教育普及機能の充実などを検討します。

● 観光産業との連携

地域の個性や、人々とのふれあいを求める観光・修学旅行が増加する今日、観光ニーズに対応したプログラムの開発や、組織連携を検討します。しかし、地域の人々が集い、活発な活動がたえず展開されている博物館でなければ、観光客の満足も得られないと考えます。地域に愛され、誇りと思われる博物館になることが、観光の前提だと考えます。

●民間企業との連携

博物館を地域に根ざしたものとするには、地場産業や地元企業と連携し、協力していくことも検討されなければなりません。アグーに代表される在来地域資源の利活用は、その成功例として高く評価されるものです。博物館運営に活力を与えるだけでなく、地元企業の振興や雇用効果を引き上げる側面もあります。

<サービス事業>

●食堂、売店

レストランやミュージアムショップは、博物館の楽しみを倍増させてくれる場所です。在来食材を使った家庭料理の提供や、企画展に合わせた商品開発、「食堂」や「(共同) 売店」の設置も、検討します。また、ミュージアムグッズ・地場の生産品・地域の工芸品の開発や販売なども、博物館のサービス事業として検討します。

<広報・宣伝>

●積極的な情報発信

新名護博物館（仮称）の施設や展示案内、名護・やんばるの文化情報を広く紹介するため、パンフレットなどの印刷物やインターネットの利用を促進します。インターネット TV などによる、世界へ向けた地域情報の発信なども検討します。

●やんばるファンの拡大

海外に住む県系人や、研究者に向けた多言語の情報発信や、全国の名護・やんばるファンに向けた博物館ならではの情報提供をすすめ、リピーターの拡大や情報収集にいかします。地域に根ざした名護・やんばるのライフスタイルがもつ、普遍的な価値と可能性を広く紹介することも、新名護博物館（仮称）の使命であると考えます。

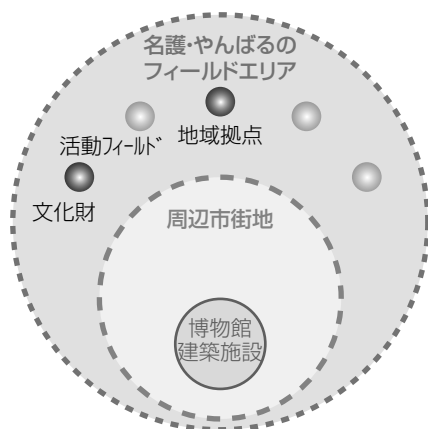
■ 施設の基本的な考え方

フィールド体験を活用する博物館

現在の博物館がもつ開放的で自由な雰囲気は、来館者をなごませ、くつろぎを与えています。名護・やんばるを表現する要素として、新しい博物館の施設計画にも引き継ぐべき視点であると考えます。

また、新博物館の施設や活動を特徴付ける重要な要素として、施設周辺地域との連携や活用、体験型の展示やフィールド活動の充実を念頭に置いた施設計画を検討します。

■ 博物館建設立地の3つの考え方



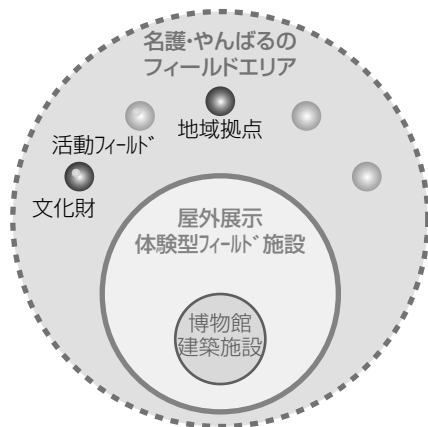
●市街地立地型の特徴

(まちづくりの視点)

- ・中心市街地の活性化

(施設計画の特性)

- ・街並み景観を形成するシンボリック建築意匠
- ・建築周辺の施設・フィールドと連携した境界性の演出
- ・空き店舗等を利用した、博物館連携施設の展開
(まち歩き型ミュージアム)



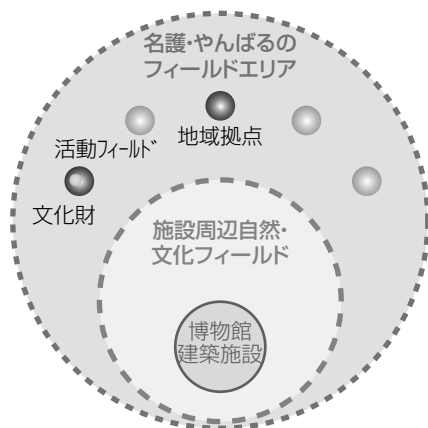
●市街地周辺型の特徴

(まちづくりの視点)

- ・周辺市街地の文化形成

(施設計画の特性)

- ・周辺市街地に賑わいを形成するシンボリック建築意匠
- ・展示棟と隣接した屋外展示や体験フィールドを博物館施設として設置。



●フィールド型の特徴

(まちづくりの視点)

- ・東海岸や羽地内海を結ぶ人の動きの活発化

(施設計画の特性)

- ・周囲の自然・文化的環境と調和した建築意匠
- ・展示棟周辺の自然フィールドを博物館と直結した体験フィールドとして活用。

■ 施設構成のイメージ

● 拠点施設

建築施設

活動機能

ものづくり工房
(生活・文化技術実習スペース)

- ・民具制作工房（実作業・展示）
- ・工芸制作工房（実作業・展示）
- ・やんばるキッチンスタジオ（実作業・飲食）等

地域交流・表現活動スペース

- ・小ホール（講座、芸能活動、映画上映）
- ・子供博物館（ハンズオン体験キット展示）
- ※地域の出前博物館作業本部機能
- ・資料制作・標本作成ラボ（実作業・展示）
- ・区・字・集落資料情報編集室・閲覧室
- ・NPO,ボランティア作業・活動室等

管理機能

調査・研究

- ・レファレンスコーナー
- ・学芸員研究室、事務室、会議室
- ・資料保管庫、図書資料室
- ・資料編集・整理作業室
- ・写真スタジオ
- ・情報システムサーバー室 等

収集・保管

- ・民俗資料、自然史資料収蔵庫（現収蔵庫との併用を検討）
- ・美術工芸資料、歴史資料収蔵庫（要空調設備）
- ・特別収蔵庫（要空調設備） 等

展示機能

常設展示

- ・やんばる総合ガイドダンス展示
- ・山のくらし・集落のくらし・海のくらし展示
- ・やんばるの生態系標本展示
- ・やんばるの村々の成り立ちと変遷展示
- ・名護ゆかりの人物展示（程順則、徳田球一、宮城与徳……）等

企画展示

- ・博物館企画展示室
- ・市民ギャラリー

多目的活動交流機能

大型民具展示
屋外実習作業
村踊り練習
芸能イベント
屋外コンサート
地域交流イベント
等

屋外施設／近隣フィールド

屋外展示

伝統的集落の構成展示

- ・民家・高倉・ウワーフル
- ・神アサギ　・カー
- ・フクギ並木　・民俗植生等

在来種を栽培する農場・アタイ

- ・アタイ（ソテツ、サツマイモ、米、大豆）
- ・薬草園、チョマ畑、果樹
- ・体験学習用水田、伝統的地割再現等

やんばるの在来家畜の飼育展示

- ・アーク、ヤギ、琉球犬、チャーン等

やんばるの在来生物の飼育展示

- ・在来の動物、植物、昆虫の飼育展示
- ・希少種の保護
- ・ピオトープ 等

やんばるの地域資源を活かした
職人技術の伝承・実演展示

- ・木工、石工、左官、陶芸、竹細工、鍛冶等
- ・作業場再現
- ・職人作業が作り続ける環境展示 等

サービス機能

駐車場（一般、大型バス）
物販施設
食堂・喫茶店
マチャグワー 等

連携

● 地域フィールド

名護地区

- 地域拠点（公民館・学校）
- 活動フィールド（自然、文化的景観）
- 史跡・文化財

地域資源事例

名護湾／名護岳／幸地川／轟の滝／ヒンプンガジュマル／イノシシ／アーク／ヒートゥ／名護城跡／名護まち／市場／三府龍脈碑／印部土手（ハル石）／馬場／国頭街道／護佐喜宮／海上交通／ソバ／十字路／七曲がり／津嘉山酒造／捕鯨、ヒートゥ狩り／セメント瓦…

屋部地区

- 地域拠点（公民館・学校）
- 活動フィールド（自然、文化的景観）
- 史跡・文化財

地域資源事例

嘉津宇岳／安和岳／安和くばのうたき／屋部小学校のデイゴ／勝山羊魂碑／渡波屋／ぶーみちや／移民／出稼ぎ／沖縄戦／ヤギ／御願所／碎石／民話／フクギ並木／風水／踊り／民話／芸能…

久志地区

- 地域拠点（公民館・学校）
- 活動フィールド（自然、文化的景観）
- 史跡・文化財

地域資源事例

久志岳／汀間川／天仁屋崎／ジュゴン／ウミガメ／褶曲／大浦湾／イノシシ／猪垣／キャンブシュワブ／観音堂／出稼ぎ／基地のまち／移民／出稼ぎ／IT産業／組踊／久志の若按司／フェーヌシマ／御嶽／カー／大浦川マングローブ観察…

羽地地区

- 地域拠点（公民館・学校）
- 活動フィールド（自然、文化的景観）
- 史跡・文化財

地域資源事例

嵐山／羽地内海／羽地大川／源河川／羽地ダム／干潟／野鳥／沿岸生物／リュウキュウアユ／イノシシ／猪垣親川城／古我知焼／我部祖河高倉／羽地川改修碑記／かてな港／養豚／お茶／炭焼／田んぼ／稲作／羽地ターブクワ／ウンジャミ／シヌグ／藍／パイン／八月踊／カー…

屋我地地区

- 地域拠点（公民館・学校）
- 活動フィールド（自然、文化的景観）
- 史跡・文化財

地域資源事例

羽地内海／干潟／野鳥／沿岸生物／大堂原貝塚／オランダ墓／愛楽園／青木恵哉／移民／出稼ぎ／干潟観察／バードウォッチング…

■ 新名護博物館（仮称）建設長期計画（案）

	初年度	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目	6 年目	7 年目	
構想・計画	・ 基本構想	・ 基本計画 ・ 収蔵資料調査						
建築・展示設計			・ 建築・展示 基本設計 ・ 展示資料収集 調査	・ 建築・展示 実施設計 ・ 展示資料収集 調査				
建築工事・展示製作					・ 建築工事 ・ 展示製作 ・ 情報システム制作 ・ 外構工事 ・ 養生期間（1 年） 等			
資料移転							・ 資料 搬入 設置	
管理運営		新館建設準備係	管理・運営計画調整			・ 管理運営組織等準備作業 ・ 活動計画等事業運営準備		● 開館



名護博物館 20 年の歩み

■ 開館以前

1 町 4 村が合併して名護市が誕生した翌年の 1971 年（昭和 46）5 月、名護市及びやんばる地域の考古歴史民俗資料が他地域への流出などにより失われていく状況を危惧した社会教育課は、有形・無形を問わない資料の調査と収集を開始した。収集された資料は、1972 年（昭和 47）7 月に旧琉米文化会館の宿直室を改造した収蔵庫に保管していたが、のちに労働組合事務所にするとのこと移動を迫られ、1976 年（昭和 51）11 月、旧琉米文化会館西側の空き地に 17 坪の中古プレハブを設置して収蔵庫とした。

1978 年（昭和 53）8 月、第 1 回民俗資料展（於旧琉米文化会館）を開催した。社会教育課において収集された資料 700 点が展示され、資料展の期間中に多くの市民が訪れた。これにより、市民の間で文化振興に対する関心が一層高まった。同年 12 月、新市庁舎建設計画に伴い、「名護市における文化振興構想」で旧市庁舎を利用した歴史民俗資料館づくりが提起された。

1979 年（昭和 54）2 月、第 1 回バーキづくり教室が開催された。これは博物館事業の三本柱の一つである「教育普及活動」の嚆矢であり、このような市民参加型の体験学習は、現在にいたるまで教育普及活動の主軸として受け継がれていくこととなる。同年 8 月、前年に引き続き「第 2 回民俗・考古資料展」が旧琉米文化会館において開催された。

1981 年（昭和 56）3 月、「名護博物館基本構想」が作成された。その趣旨は、名護市に求められる博物館とは「名護やんばるの自然と文化」をテーマにした地域総合博物館であり、個性豊かで市民の誇りとなるような文化活動の拠点をめざすというものである。同年 4 月、新市庁舎建設のため収蔵庫が撤去されるのに伴い、企画室事務室棟（旧庁舎）を収蔵庫に改修し、そこへ資料を移動させた。同年 6 月、この基本構想の事業工程に基づいて名護博物館準備室（室長：島袋正敏氏）を設置し、翌月には「名護博物館基本案」が作成された。同年 12 月、第 1 期改修工事（施工者：石川土建）が起工し、翌年 2 月に竣工した。

1982 年（昭和 57）3 月、いち早く市民ギャラリーがオープンした。ギャラリーで行われた催し物を観覧した市民が、その帰り道に開館へ向けて作業が着々と進んでいく様子を目の当たりにすることとなった。これによって博物館づくりに強い関心を抱き、協力する市民が増え始めた。このことから、名護博物館の基本理念である「ぶりでい」による博物館づくりが、既にこの時から始まっていたと言えよう。同年 10 月、第 2 期改修工事（施工者：平孝組）が起工し、翌年 2 月に竣工した。

1983 年（昭和 58）7 月、開館に向けて最終的な「展示基本計画書」が作成され、その中で、①過去から現代に向けて生活を表現する博物館、②地域の情報センターとしての博物館、③資料の調査・収集・整理・保管・学芸研究そして教育普及の 3 つの機能を有効に働かす博物館、④みんなでつくる博物館、⑤世界にひらく博物館といった、今日の博物館の基となる 5 つの基本方針が確立する。同年 10 月、第 3 期改修工事（常設展示室工事、施工者：玉城建設）が起工した。

改修工事の基本設計（第 1 ～ 3 期）、実施設計（第 3 期）や基本構想作成時のアドバイザーとして、一連の事業に深く関わったのが、現在の市庁舎を設計した象設計集団（Team Zoo）の一員であった方圓館（代表者：坂本和正氏）である。杉丸太材をふんだんに使った天井格子や個性的な展示用の建

具など、ファニチャーデザインを最も得意とする方圓館ならではのアイデアが随所にちりばめられている。

そして、1984年（昭和59）1月、第3期改修工事が竣工して名護博物館は完成し、開館を待つばかりとなった。

■ 開館後～現在

1984年（昭和59）3月1日、オープンを待ちわびた多くの入々が見守るなか、名護博物館は開館した。

初代館長には、引き続き名護博物館準備室長の島袋正敏氏が任命された。館の運営にあたっては、昭和58年12月26日付条例第15号「名護市博物館設置条例」、昭和59年4月2日付条例第11号「名護市博物館使用料徴収条例」、昭和59年3月19日付教委規則第1号「名護市博物館管理運営規則」がそれぞれ制定された。また、昭和59年3月24日付条例第11号「名護市博物館協議会条例」が制定され、博物館協議会が発足した。

入館料は当初、大人100円、大学生50円、小・中学生及び高校生30円だったが、平成7年12月1日からは、大人150円、大学生100円、小・中学生及び高校生50円に引き上げられた。

1985年（昭和60）10月、開館後も懸案事項となっていた収蔵庫建設工事が起工し、翌年3月に竣工した。また、収蔵庫については、亜熱帯地域の調査をもとに設計がなされ、壁や屋上部の断熱を工夫した高倉の形式をとり、自然換気と除湿機による空調で省エネルギーを図りながら資料の保存を行えるものとなった。

資料の受け入れ態勢が整った結果、収集活動が一段と活発になった。現在、歴史民俗資料6,741点、自然史資料8,067点、計14,808点（2003年度末現在）を所蔵している。歴史民俗資料においては、古我知焼、宮城真治資料、「琉球蔦真景」（市指定文化財）や宮城与徳絵画資料などの学術的、芸術的に価値の極めて高い資料を所蔵している。また、自然史資料についても名護市及びやんばる地域の動植物が収集されており、特に海生哺乳類に関しては、学術的にも非常に貴重な資料を数多く所蔵している。

1987年（昭和62）7月、名護市内の小学5・6年生を対象にした「ぶりでい子ども博物館」が開始された。博物館における教育普及活動は、先述のとおり開館以前から行われ続けていたが、「ぶりでい子ども博物館」の開催によって、内容がさらに深化し、さらなる発展を遂げるきっかけとなった。

1989年（平成元）3月、博物館中庭に高倉が移築された。この高倉は元々大宜味村謝名城に建てられたが、のちに那覇市に移築され、県立博物館を経て名護博物館に寄贈されたものである。昔の生活を知る上での貴重な資料であり、現在も市内小中学校の社会科見学に利用されている。博物館活動が軌道に乗ってきた中、1993年（平成5）8月、博物館法に基づく登録博物館として認定された（沖縄県第4号）。

1994年（平成6）3月、名護博物館は開館10周年を迎えた。開館10周年記念式典を盛大に挙行し、同時に開館10周年記念企画展「ピトゥと名護人」が開催された。また、以前からイルカを始めとする海生哺乳類に関する資料を収集し続けており、その活用方法が大きな課題となっていた。そこで、企画展の展示の一部を常設展示「沖縄近海の鯨類」として残し、海生哺乳類に関する資料の活用を図

るとともに、比較的弱かった自然史に関する展示を充実させた。

1995 年（平成 7）8 月、博物館学芸員実習生の受け入れを開始した。同年 10 月、1986 年（昭和 61）から始まった名護市内の墓分布形態調査が終了した。調査期間は 9 年に及び、名護市の全行政区を対象にしたこの調査によって、沖縄の葬制・墓制を知る上での貴重なデータを収集することができた。その成果は、「名護市墓分布形態調査報告書 1～5」にまとめられ、内外の人々の利用に供されている。

1996 年（平成 8）3 月、常設展示「名護市の人生儀礼：祝い・祀り」を開始し、常設展示のさらなる充実を図った。

1999 年（平成 11）6 月、故平良光夫氏の古銭コレクション 6,344 点が寄贈された。寄贈された貨幣資料をもとに、2000 年（平成 12）2 月、特別展「貨幣展」を開催した。

2001 年（平成 13）3 月、名護博物館友の会が発足した。同年 5 月、開館後 18 年が経過した名護博物館は、変化の著しい社会状況と市民のニーズに応えた博物館活動を模索するため、館長より名護博物館協議会へ諮問、同年 11 月「新しい名護博物館のこれからの方向について」の答申がなされた。

2002 年（平成 14）11 月、名護出身の画家宮城与徳の絵画「ニューポートビーチ」が、袖井林二郎氏より寄贈された。2003 年（平成 15）2 月、博物館中庭に設置されている高倉の屋根のかやを葺き替えた。

■「ぶりでい子供博物館」活動

●第0回 1986年（昭和61）

玩具づくり・友寄隆史／稲作（脱穀のみ）・大城豊政

●第1回 1987年（昭和62）

自然観察会・嵩原健二 新里孝和／卓上織機で織物・山城洋子／豆腐作り・上間助喜／遺跡めぐり・上原政昌／イルカの話・内田詮三／紙すき・比嘉淳子／稲作・大城豊政

●第2回 1988年（昭和63）

羽地大川を歩く・嵩原健二 渡具知伸／地引網・宮里尚／塩作り・眞喜志康篤 比嘉道子／卓上織機で織物・山城洋子／文化財めぐり・上原政昌 比嘉武則／玩具づくり・大兼久ヨシ子／紙すき・比嘉淳子

●第3回 1989年（平成元）

土器づくり・比嘉豊光／稲作・大城豊政 大城ミヨ／塩作り・眞喜志康篤 比嘉道子／自然観察会（長浜原 嘉津宇岳 屋部川 多野岳 屋我地海）・嵩原健二／玩具づくり・大兼久ヨシ子 大城森一／紙すき・比嘉淳子 比嘉ひとみ

●第4回 1990年（平成2）

土器づくり・比嘉豊光 上原政昌／塩作り・照屋秀利／自然観察会・嵩原健二 比嘉道子／稲作・東江常雄 宮城宜男／火おこし・上原政昌／玩具づくり・大城森一

●第5回 1991年（平成3）

豆腐作り・比嘉ひとみ 大兼久ヨシ子／稲作・東江常雄／紙すき・比嘉ひとみ 大兼久ヨシ子／自然観察会（嘉津宇岳）・嵩原健二／ひもの結び方・名護市消防署職員／自然観察会（源河川）・安座間安史

●第6回 1992年（平成4）

紙すき・上地正勝／稲作・東江常雄／塩作り・照屋秀利 大城道子／山之端一博／豆腐作り・大城栄子／ビデオ上映と講話・上原政昌

●第7回 1993年（平成5）

自然観察会（大浦川）・安座間安史／焼き物・比嘉豊光／稲作・東江常雄／塩作り・照屋秀利 大城道子 山之端一博／紙すき・渡具知淳子／黒糖作り・神元一司／貝の工作・宮里初男／紙すき・渡具知淳子／自然観察会（大浦川）・安座間安史

●第8回 1994年（平成6）

稲作・川上達也 宮里至（名護博物館長）／塩作り・照屋秀利 大城道子 山之端一博／土器づくり・比嘉豊光／黒糖作り・神元一司／紙すき・渡具知淳子／自然観察会（乙羽岳）・安座間安史／カンカラ三線作り・島袋茂盛

●第9回 1995年（平成7）

稲作・川上達也／陶芸・比嘉豊光／塩作り・照屋秀利 大城道子 山之端一博／黒糖作り・神元一司／自然観察会（大国林道）・安座間安史／漆喰シーサー作り・伊志嶺達雄

●第10回 1996年（平成8）

稲作・川上達也／発掘体験・上原政昌 比嘉久（名護市文化財係）／紙すき・渡具知淳子／黒糖作り・神元一司／ラジオ作り・仲嶺真仁

●第11回 1997年（平成9）

稲作・川上達也／塩作り・照屋秀利／黒糖作り・神元一司／自然観察会（源河川）・安座間安史／稲作・川上達也

●第12回 1998年（平成10）

化石のレプリカ作り・吉住晴美／豆腐作り・仲宗根竹子／黒糖作り・神元一司／自然観察会（嘉津宇岳）・安座間安史／稲作・川上達也

●第13回 1999年（平成11）

塩作り・照屋秀利／紙すき・渡具知淳子／黒糖作り・神元一司／自然観察会（比地大滝）・上野和昌

●第14回 2000年（平成12）

稲作・川上達也／陶芸・豊里明美／黒糖作り・神元一司／自然観察会（山里カルスト）・安座間安史

●第15回 2001年（平成13）

稲作・川上達也／陶芸・豊里明美／黒糖作り・神元一司／陶芸・豊里明美

●第16回 2002年（平成14）

稲作黒糖作り・川上達也 神元一司／土器づくり・豊里明美／稲作黒糖作り・川上達也

■ 博物館講座

● 1981 年（昭和 56）

第 1 回（8 月 28 日）生活の中の博物館：坂本和正／第 2 回（12 月 28 日）ヤンバルクイナが発見されるまで：友利哲夫／第 3 回（2 月 27 日）暗室作業の実際：小橋川共男／第 4 回（3 月 1 日）写真の見方 読み方：小橋川共男

● 1982 年（昭和 57）

第 5 回（6 月 24 日）日本刀のうつりかわり：村上仁賢／第 6 回（11 月 21 日）沖縄の漆工芸：前田孝允

● 1984 年（昭和 59）

第 7 回（4 月 20 日）春の昆虫たち：佐藤文保／第 8 回（12 月 18 日）沖縄の在来家畜のはなし：川島由次／第 9 回（2 月 8 日）カエルのはなし：干木良芳範／第 10 回（2 月 16 日）豚のはなし：仲宗根光彦

● 1985 年（昭和 60）

第 11 回（6 月 28 日）自然と人の生活：小橋川共男／第 12 回（10 月 2 日）山原のへび：当山昌直／第 13 回（3 月 22 日）沖縄における綿栽培と蒲団づくりについて：原園子

● 1986 年（昭和 61）

第 14 回（4 月 4 日）星座のはなしとハレー彗星：宮城松秀／第 15 回（4 月 25 日）沖縄のトンボ：渡辺賢一／第 16 回（6 月 3 日）喜如嘉の屋号について：新里幸昭／第 17 回（7 月 17 日）沖縄の植物の生いたちを訪ねて：新里孝和／第 18 回（1 月 25 日）中南米の風土と生活：シルビオ・モレーノ／第 19 回（2 月 24 日）馬の進化の話：武居洋／第 20 回（3 月 15 日）入国移民の概要：エンリケ・W・山城

● 1987 年（昭和 62）

●第 21 回（6 月 6 日）名護やんばるのシダ：島袋守成／第 22 回（9 月 8 日）山原とおもろそうし：波照間永吉／第 23 回（2 月 10 日）泡盛のはなし：照屋比呂子／第 24 回（3 月 8 日）羽地の村々ができるまで：安里進

● 1988 年（昭和 63）

第 25 回（4 月 6 日）スライドで山原の岩や石見てある記：藤田宏／番外（4 月 30 日）焼き物のおもしろさ：武田浪人（信楽焼）／第 25 回（10 月 20 日）やんばるの自然：干木良芳範／第 26 回（11 月 8 日）歌謡と祭祀：新里幸昭／第 27 回（2 月 23 日）沖縄の豚と山羊：島袋正敏

● 1989 年（平成 1）

第 28 回（9 月 20 日）沖縄の民具：上江洲均／第 29 回（2 月 22 日）ネパールの森と水の適性技術：大崎正治／第 30 回（3 月 4 日）沖縄の村落：屋部高志

● 1990 年（平成 2）

第 31 回（8 月 3 日、1 月 1 日）美しかった山原：中村保

● 1991 年（平成 3）

第 32 回（12 月 26 日）屋我地マース、能登の塩：比嘉道子／第 33 回（1 月 16 日）しめ縄づくり：宮城良夫／第 34 回（5 月 13 日）沖縄の鍛冶屋：福地廣昭

● 1992 年（平成 4）

第 35 回（12 月 18 日）今、やんばるの染織は：真栄城興茂／第 36 回（1 月 21 日）山原材の特徴と使用方法：新垣吉紀／第 37 回（9 月 10 日）身近な植物を調べてみよう：比嘉正一

● 1993 年（平成 5）

第 38 回（12 月 17 日）ブクブク茶を飲んでみよう：安次富順子／第 39 回（3 月 18 日）郵便の楽しみ：佐藤克彦／第 40 回（6 月 24 日）沖縄近海のクジラ：内田詮三

● 1994 年（平成 6）

第 41 回（3 月 10 日）北部のグスク：當眞嗣一／第 42 回（3 月 31 日）沖縄戦とヤンバル：大城将保／第 43 回（6 月 9 日）風水と墓：小熊誠

● 1995 年（平成 7）

第 44 回（6 月 9 日）骨格からみた沖縄のひと：土肥直美／第 45 回（8 月 20 日）やんばるの戦跡めぐり：比嘉親平／第 46 回（11 月 24 日）名護博物館の染織資料：與那嶺一子／第 47 回（3 月 22 日）名護ソバを食べよう：伊波寛一

● 1996 年（平成 8）

第 48 回（5 月 10 日）エコミュージアムのやんばるでの可能性：山本英康／第 49 回（6 月 18 日）美から蛮風へー針刺からの解放と近代沖縄の女たちー：比嘉道子／第 50 回（8 月 9 日）古銭にロマンを求めて：翁長良明／第 51 回（11 月 19 日）沖縄の古窯古我知焼：宮城篤正

● 1997 年（平成 9）

第 52 回（5 月 29 日）年の変わり目はいつか？ー宮城真治の「八月正月」説をめぐってー：中鉢良護／第 53 回（8 月 14 日）アイヌ文様刺しゅうのころ：チカッブ美恵子

● 1998 年（平成 10）

第 54 回（8 月 21 日）チョウの舞うまちづくり：大城安次／第 55 回（3 月 1 日）泡盛の歴史と文化：萩尾俊章

● 1999 年（平成 11）

第 56 回（7 月 9 日）お墓は家族のタイムカプセル：安里進／第 57 回（9 月 8 日）ピトゥの生活誌：粕谷俊雄／第 58 回（11 月 5 日）沖縄の身近なチョウと食草：知花聡

● 2001 年（平成 13）

第 59 回（12 月 1 日）骨でさぐるヒト・動物：川島由次・土肥直美

● 2002 年（平成 14）

第 60 回（11 月 1 日）沖縄のセメント瓦：比嘉武則・坂下宙子

● 2003 年（平成 15）

第 61 回（11 月 9 日）沖縄の度量衡調査を終えて：東麻美・稲福奈津子・仲村干賀子

■ 体験学習講座 ～市民があつまる～**■ 博物館準備室設置**

●1981年(昭和56)

6月1日～8月21日・第1回植物同定会／12月20日・第1回郷土のコマづくり教室

●1982年(昭和57)

5月21日・拓本講習会／8月8日・夏の植物観察採集会／8月22日・バーキづくり教室

●1983年(昭和58)

8月7日・植物観察採集会／8月14日・バーキづくり教室

■ 名護博物館開館

●1984年(昭和59)3月1日～1984年度(昭和59)

7月11日・辺土名小昆虫教室／7月28日・バーキ作り指導者養成講習会／7月29日・夏の自然植物観察採集会／8月4、5日・バーキづくり教室／8月12日・ボーイスカウト名護一団昆虫教室／8月14日・子ども昆虫教室／8月16日・聖公会昆虫教室／12月23日・玩具づくり教室／12月26日・ソーキづくり指導者養成講習会／2月24日・ソーキづくり指導者養成講習会／3月12日・親子手づくり玩具教室

●1985年度(昭和60)

5月26日・ソーキづくり指導者養成講習会／6月2～10日・ソテツ味噌づくり／7月21日・親子手作り玩具教室／7月28日・夏の自然・植物観察採集会／8月10、11日・バーキづくり教室／8月8～11日・聖公会昆虫教室／8月14日・ワラ縄をなう会／3月9日・親子手作り玩具教室

●1986年度(昭和61)

6月28日・シダの観察会(名護城)／7月5、6日・バーキづくり指導者講習会／7月27日・夏の自然・植物観察会(於嘉陽)／8月2、3日・バーキづくり教室／8月9日・シダの観察会(名護城)／12月13、14日・県立名護青年の家まつりバーキづくりコーナーに協力／1月11日・オニムーチャーづくり／1月17日・大宮小学校親子玩具づくり教室(3学年親子150名)

●1987年度(昭和62)

6月6日・シダの観察会(名護城周辺)／6月14日・天仁屋小学校親子玩具づくり協力／6月27日・豆腐作り講習会／6月28日・福祉まつり手作りコーナーに協力／7月26日・植物観察と採集会(於嘉陽)／7月30日・バーキづくり指導者講習会／8月15日・バーキづくり教室／9月13日～・名護高校1年生へバーキづくり指導「山原ゆいもある」へ玩具づくり協力指導

●1988年度(昭和63)

7月17日・バーキづくり教室／8月7日・夏の植物観察会(於嘉陽)・12月15、16日・ゆうなを使った和紙づくり／1月14日・ムーチャーづくり

●1989年度(平成元)

7月29、30日・バーキづくり教室／8月13日・夏の自然観察会(名護城周辺)
1月13日・ムーチャーづくり

●1990年度(平成2)

7月28、29日・バーキづくり教室／9月16日・野鳥観察会／12月15日・しめ縄づくり

●1991年度(平成3)

8月10、11日・バーキづくり教室／9月8日・自然観察 大浦マングローブの生物たち／10月20日・塩づく

り体験講座／12月26日・第33回博物館講座しめ縄づくり

●1992年度(平成4)

8月16日・昆虫観察会 幸地又～名護城／8月22、23日・バーキづくり教室／12月19日・しめ縄づくり教室

●1993年度(平成5)

7月31日～8月1日・バーキづくり教室／8月21日・夏の自然観察会 汀間ゲーヤフー滝／12月18日・しめ縄づくり教室

●1994年度(平成6)

7月30日・バーキづくり教室／8月13日・屋我地小学校親子ワラ馬づくり教室／8月14日・昆虫採集と標本作製会／12月4日・名護市生涯学習振興大会にてワラ馬づくり教室／12月7日・しめ縄づくり教室

●1995年度(平成7)

8月26日・バーキづくり教室／9月17日・自然観察会「やんばるの山を見て考える・大国林道」／12月3日・名護市生涯学習振興大会にてワラ馬づくり教室／12月16日・しめ縄づくり教室

●1996年度(平成8)

7月7日・久志小学校へアダン葉おもちゃ指導／8月17、18日・バーキづくり教室／10月19日・親子塩づくり／12月1日・名護市生涯学習振興大会にてワラ馬づくり教室／12月21日・しめ縄づくり教室／3月30日・自然観察会 源河川

●1997年度(平成9)

7月26、27日・バーキづくり教室／11月13、14日・シーサーウー(獅子の毛)をつくろう／12月7日・名護市生涯学習振興大会にてアダン葉あそび／3月20日・自然を撮ろう・本部町にて

●1998年度(平成10)

8月15、16日・バーキづくり教室／10月4日・塩づくり／12月20日・しめ縄づくり

●1999年度(平成11)

8月7、8日・バーキづくり教室／8月29日・昆虫採集と標本づくり／12月19日・手打ちそばづくり／12月26日・しめ縄づくり

●2000年度(平成12)

8月29、30日・バーキづくり教室／11月5日・塩づくり／1月20日・芭蕉のウービキ

●2001年度(平成13)

6月10日・自然観察会 ナングヌクの植物／8月5日・キノコ観察会／9月16日・塩づくり講座／1月27日・芭蕉のウービキ

●2002年度(平成14)

5月25日・キノコ観察会 名護城周辺／7月25日・夏休み自然体験隊 幸地川／7月30日・夏休み自然体験隊 名護岳／8月15日・夏休み自然体験隊 慶佐次マングローブ／8月25日・夏休み自然体験隊 嘉津宇岳／9月29日・塩づくり／1月16日・芭蕉のウービキ

●2003年度(平成15)

5月24日・名護の地質 化石観察会／7月30日・夏休み自然体験隊 比地大滝周辺の散策／8月3日・夏休み自然体験隊 屋我地の干潟／8月16日・夏休み自然体験隊 大宜味六田原の山を歩く／11月15日・塩づくり／2月8日・芭蕉のウービキ

■ 企画展

- 第1回「名護やんばるのカエル」展・1984年(昭和59)2月5日～2月10日
- 第2回「名護やんばるのヘビ」展・1985年(昭和60)10月2日～10月6日
- 第3回「仲宗根善行」展・1985年(昭和60)11月3日～11月10日
- 第4回「名護やんばるのシダ」展・1986年(昭和61)8月6日～8月10日
- 第5回「アルゼンチン風俗絵画」展・1987年(昭和62)1月21日～1月25日
- 第6回「名護やんばるの自然」展・1988年(昭和63)10月11日～10月23日
- 第7回「名護やんばるの農具」展・1989年(平成元)9月13日～9月24日
- 第8回「名護やんばるの野鳥」展・1990年(平成2)9月15日～9月23日
- 第9回「塩一屋我地マースを見直すー」展・1991年(平成3)10月25日～11月17日
- 第10回「自然の中で生きる虫たち」展・1992年(平成4)8月1日～9月5日
- 第11回「ピトゥと名護人」展・1994年(平成6)3月1日～4月3日
- 第12回「祝い・祀り・墓」展・1994年(平成6)11月1日～11月30日
- 第13回「極限の人々ー名護やんばるの戦争ー」展・1995年(平成7)8月15日～9月17日
- 第14回「沖縄の古窯古我知焼」展・1996年(平成8)11月8日～11月24日
- 第15回「名護やんばるの酒」展・1998年(平成10)10月30日～11月22日
- 第16回「飛び立つ生命～まちにチョウを増やそう～」展・1999年(平成11)10月27日～11月14日
- 第17回「屋我地～その歴史と自然～」展・2000年(平成12)10月27日～11月12日
- 第18回「骨格」展・2001年(平成13)12月3日～12月22日
- 第19回「沖縄のセメント瓦」展・2002年(平成14)10月29日～11月10日
- 第20回「沖縄の度量衡」展・2003年(平成15)10月31日～11月30日

■ 検討委員名簿

氏名	所属	専門分野	備考
宜保 榮治郎	国立劇場 おきなわ	民俗・芸能	委員長
豊見山 和行	琉球大学	琉球史、歴史学	
島袋 正敏	名護市文化財保存調査委員 ものづくり塾長	社会教育	副委員長
千木良 芳範	沖縄県教育庁文化課 名護市動植物総合調査員	生物	
安里 進	沖縄県立芸術大学	考古学、歴史学	
前田 貴子	株式会社前田産業ホテルズ	観光	
岸本 能子	名護市女性ネット	子育て支援	
仲地 暁	宜野座村立漢那小学校 国頭地区理科教育研究会会長	理科	
宮城 一夫	沖縄県立石川高校 高校生我がまち展	美術	
仲原 弘哲	今帰仁村歴史文化センター	歴史	

■ スケジュールと主要議題

第1回検討委員会；平成20年12月5日（金）

- （1）委嘱状交付 （2）議長の選出 （3）名護博物館の現状と課題
- （4）名護市後期総合計画での博物館の位置づけ
- （5）博物館をめぐる現状と新館建設がめざすべき方向性（意見交換）

第2回検討委員会；平成21年1月9日（金）

- （1）基本理念について（博物館のあり方）
- （2）基本テーマについて（博物館の展開内容について）

第3回検討委員会；平成21年1月30日（金）

- （1）基本理念と基本テーマ
- （2）博物館の機能と事業
- （3）施設構成の考え方

第4回検討委員会；平成21年2月20日（金）

- （1）基本構想概案の提示（管理運営方針含む）
- （2）用地選定の考え方

第5回検討委員会；平成21年3月10日（火）

- （1）基本構想（案）の提示（確認と詳細調整）
- （2）事業推進スケジュールの説明

■ 検討委員会議事録要約

【第1回検討委員会】

平成20年12月5日（金） 午後3時00分～午後5時00分

場所：名護博物館ギャラリー

出席者：

宜保榮治郎委員、島袋正敏委員、仲地暁委員、宮城一夫委員、安里進委員、仲原弘哲委員、豊見山和幸委員、前田貴子委員、名護市教育委員会、名護博物館



● 名護博物館の現状と課題

事務局から事前に配られた資料や当日配られた資料をもとに、各委員が名護博物館の現状や課題について、発言されました。

なかでも、これまでの博物館活動に対する評価は高く、「施設が貧弱な割に職員が一生懸命やってきたことがよく分かる」という発言もありました。

しかし、入場者が慢性的に少ない点や、スタッフの不足が活動の停滞を招いていると指摘する声もあがりました。学芸業務を安心しておこなうためにも、観光客の取り込みを新館建設では当初から考慮する必要があるとして、外から来るお客さんに、名護・やんばるの魅力を訴え、リピートさせることが大切だとする意見が出されました。

● 名護市後期総合計画における博物館の位置づけ

※「第4次名護市総合計画（後期基本計画）」について事務局から説明。

博物館新館建設については、具体的な検討はこれからであり、まず今年度の構想をもとに基本計画を決めてから、具体的な建築について検討するという教育委員会の考えが確認されました。

委員からは、「博物館をなぜつくろうとしているのか」という議論を、しっかりと深めていかなければ、「箱をつくって魂を入れない」ということになってしまうという発言がありました。市民活動を中心として、そこに観光客がくるというコンセプトを明確にするためにも、時間をかけた議論をかさねる必要があり、市民の意見を聞く作業に時間をかけるべきだという指摘がありました。

また、博物館は建物が完成して終わるものではなく、成長していくものだと、みんなで継続的に作りあげていく必要性を指摘する意見もありました。

博物館側から、施設の老朽化と狭小性、駐車場が狭い点が大きな問題であり、バリアフリーについても配慮されていない現状の改善を訴える意見が出されたほか、建物や経営状況に関する報告がなされました。

● 新館建設がめざすべき方向について

学校教育との連携不足や、それぞれの課題を指摘する意見などが出されましたが、駐車場と博物館内の教室確保がクリアできれば、中南部の学校による博物館利用も可能だとする積極的な意見もあり、博学連携の具体的な取り組みにつながる事が期待されます。

博物館新館の方向性は、これまでの実績を見ても基本的に踏襲することで、委員の意見は一致していると思われますが、この機会にこれまでの活動をもう一度見直したいとして、野外活動を中心に考えるなら、施設は現在の博物館のリニューアルぐらいでいいかもしれないとして、「箱物先行に流されなくて、これまでの実績を踏まえてやってほしい。こんなに市域に向いて活動している博物館はそうない」という声もありました。

また、入館者数でははかれない地域活動への貢献も大きく、入館者数を増やすあまり観光客に目を向けるのではなく、地域に向けた活動の結果として、外の人たちがやって来る状態が望ましいとする意見に、他の多くの委員も賛同しました。

入館者を増やすことは永遠の目標ですが、そこだけに目を向けるのではなく、名護博物館がこれまでやって来た地域活動を重視することが、結局は観光につながるということです。

以上で、第1回の検討会議は終了しました。

【第2回検討委員会】

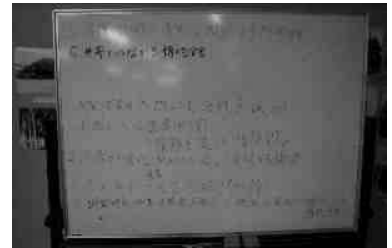
平成21年1月9日（金） 午後3時00分～午後5時00分

場所：名護博物館ギャラリー

参加者：

宜保榮治郎委員長（中座）・島袋正敏副委員長・安里進委員・前田貴子委員・宮城一夫委員・岸本能子委員・千木良芳範委員、名護市教育委員会、名護博物館

※名護博物館の新館建設構想や計画書、提言書の要点や意見から、事務局が作製した（1）～（6）の基本理念案に基づき、新たな基本理念について話し合われました。

**● 基本理念****（1）やんばるの入口として、北部全域の自然と文化を表現する**

山原全域をひとつの文化圏とするなら、新しい博物館は名護市だけではなく山原全体をカバーする性格と、インフォメーション機能を持つことが望ましい。さまざまな地域情報を集積して公開することも役割の一つであり、名護・山原全体の概要は、名護博物館で分かるようにするべきだという認識で一致しました。

（2）過去から現代、未来に向けてのくらしを表現する施設

展示されている生活道具をまったく知らない人が増えている現在、このままでいいのかという問題が提起され、「現代の豊かさとはどういうことか」と観覧者に提案するような積極性を、博物館が持つことも必要ではないかという議論がなされました。

なぜ、博物館で過去を見せているのかというと、単に昔を懐かしむだけではなく、昔と今を比較することで未来を考えて欲しいためです。過去のものはすべて、現在の暮らしにつながっているのです。新しいものだけではなく古いものも混在する町が、みんなが求める住みよい町ではないでしょうか。現在も役に立つ過去も多く、山原の暮らしは、大都会の摩天楼を目ざすものではないという意見が出されました。

一方、現代資料の収集は1960年代でほぼ終了し、すでに50年ぐらいの資料的空白が生じているため、それをどう埋めていくのかという課題も指摘されました。

（3）資料の調査・収集・整理・保管、学術研究、教育普及の3つの機能を有効に働かせる

博物館としては当たり前すぎるので、理念から外してもいいという意見もありましたが、小さな施設では、それぞれが効果的に結びつき、有効に働くことが求められます。分業化がすすんで、それぞれの担当者や機能がバラバラにならないためにも、トータルで活動する姿勢を示すことが必要と判断されました。

（4）みんなでつくる博物館

教育委員会だけが博物館をつくるのではなく、名護市内外の人たちも巻き込みながら、活動し続け

るという理念です。たとえばガウディ（建築家）の有名な教会などは、現在も造り続けていくことで仕事が出来、暮らしもそこに成り立っている。そういった理念と活動が継続されると考えるなら、博物館はさまざまな可能性を含んでいると考えられます。博物館はオープンして終わりではなく、さまざまな場面で、色々な人々と関わりを持ちながら成長し続けるものであり、終わりはないといえます。

（5）名護・やんばるの情報を提供する博物館

博物館だけで完結するのではなく、現場・フィールドに行くための案内や説明をおこなう機能を持つことや、インターネットを使った情報発信も必要とする意見が出されました。ものの背後にある地域との関わりなどについても、丹念に情報を拾い集めていくことが重要であり、地域の情報センターとして、情報の受発信は不可欠だという認識で一致しました。

また、市史編さん室や文化財係との連携、他館とのネットワーク化の必要性も論じられましたが、同時に、バーチャルな情報だけの提供ではなく、人と人が向き合ったり、本物の博物館資料を通して身体に記憶させるような、体験的活動も忘れてはならないとの指摘がありました。

（6）世界とつながる博物館

外国人の来館を直接の目的としないまでも、県外・国外に住む県系人を含む世界中の人が、名護・山原の情報にアクセスできる状況を整えることは今や当然であり、世界を目指す人材の育成に不可欠という認識で一致しました。

以上、6つの基本理念が会議で検討されましたが、あわせて以下のような指摘も出されました。

環境に対する危機感が広がっている現在、暮らしのあり方そのものも問い直されており、そこに博物館が果たす役割も大きなものがあります。人々のライフスタイルに直接踏み込んでいくような、積極性を持つことも必要であり、教育の問題とともに博物館の基本理念を考える上で大きな柱になるという意見でした。

市町村の博物館は、地元の暮らしや状況をより細やかに反映できる場といえます。名護博物館の基本は名護・山原を中心に考えることであり、「市民が喜ばば外から来た人も楽しめる」ということになるでしょう。基本理念はそのためのより所だといえます。

また、基本理念や基本テーマは、子どもにも分かるような文言にすることが大切ということから、今回話し合われた方向性を踏まえながら、さらに表現を平易なものにすることが確認されました。

● 基本テーマ

基本理念の集約された言葉である基本テーマについて検討されました。現在の博物館の基本テーマ「名護・やんばるの生活と自然」については、キャッチコピーとして捉えると平凡で、もう少し工夫が必用ではないかという意見や、山原の森や自然のどこがいいのか、何が素晴らしいのかを強く打ち出していく必要があり、博物館の意思が問われるという意見などが出されました。

そして、現在の社会生活が、名護においてもますます自然から遠ざかっていることは否めないだけに、これからどう自然や環境・暮らし・教育などに関わっていくのかを、博物館としても考えないといけないとの指摘がされました。

【第3回検討委員会】

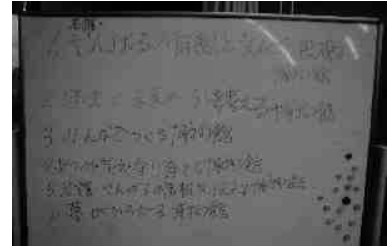
日時：平成21年1月30日（金）

午後3時00分～午後5時00分

場所：名護市中央公民館（2階・第3研修室）

参加者：

島袋正敏副委員長・安里進委員・宮城一夫委員・岸本能子委員・千木良芳範委員・仲地暁委員・仲原弘哲委員、名護市教育委員会、名護博物館

**● なぜ博物館を造るのか、博物館で何をするのか**

前回で示された基本理念の確認の前に、博物館建設に対する意義や認識を一致させることが重要だということから、「なぜ博物館を造るのか」「博物館で何をするのか」という点について話し合われました。

現在の博物館は、山原の自然と暮らしについて考えることを、開館当初から基本に置いてきましたが、社会状況の変化に対応した、名護・山原の博物館だからこそできることを推し進めることが必要だとする意見が出されました。

また、名護にある55の字（あざ）から生まれた個性を引き出し、それを理念に反映させたり、来館者に示して現場に導いていくことも重要だとする意見も出されました。

さらに、博物館は学芸員の思想をぶつける場であり、来館者の心を揺さぶるメッセージを発することが本質だとの指摘も出され、単に過去を懐かしがるだけではなく、未来をどう考えるかという具体性を提示する課題を背負っているという声が上がりました。

気候変動や環境、食の安全の問題など、私たちを取り巻く環境が厳しさを増すなか、子どもたちにその影響は強く現れます。全国一律の教育制度がすみ、故郷を学ぶ機会が少なくなりつつある学校教育において、博物館の果たす役割は大きいとする意見も出されました。次の世代を育てるための活動を、博物館がどう組織していくのか問われるところです。

● 基本理念の検討**(1) やんばるの入り口として、北部全体の自然と文化を表現する博物館**

「やんばるの入口」という表現に歴史的・地理的な立場から異論が出され、表現をシンプルにするとということもあって、前半の部分は割愛されました。

(2) 過去から現在・未来にむけてのくらしを表現する博物館

博物館は地域の過去と現在の暮らしを比べ、未来をみるところであり、「現在」は見る人自身なので外してもいい、という意見が賛同を得ました。「くらし」を外す案も出されましたが、名護博物館の個性のひとつとして残したいという意見が示され、オジイ・オバアの知恵が今も生きていることを学ぶことや、さまざまな体験のなかで道具が使われてきたことを考えると、外せないという事になりました。

「過去から」を外す案も検討されましたが、未来を考える材料が過去だとすれば、「過去」は外せないという結論になりました。

(3) みんなでつくる博物館

分かりやすくいいということで、一同異議なく賛成となりました。

(4) 資料の調査研究、収集保管、教育普及の機能を有効に生かす博物館

理念からは外してもいいという意見が少なからず出されましたが、博物館の機能を明確に示し、それぞれが一体となって活動する博物館の姿を一般の方々に説明するためにも、残した方がいいということになりました。しかし、子どもにも分かる表現という点で「集め・考え・守り育てる～」と変えられ、具体的な機能は説明文に加えることになりました。

(5) 名護・やんばるの生活と自然の情報を提供する博物館

1 番に内包されるという点から、理念としては外していいという意見が出されましたが、表現を簡単にして「名護・やんばるの情報を伝える～」とすることになりました。

(6) 世界につながる博物館

すでに世界がつながっている現在、子供たちを刺激する「夢が広がる」のような表現の方がいい、ということでまとまりました。

また、主体性をどこに置くかが重要であるとして、名護・山原にある自分たちの生活空間から物を見ていく姿勢について語られました。

● 基本理念追加案について

事務局案として追加して示された、4つの基本理念案について審議しました。美術館の機能を想定した項目について審議が集中しましたが、6つの基本理念案の中に4案とも含むということで、最終的には意見が一致しました。

美術館建設案が実現しないまま推移してきたことや、これまで博物館ギャラリーで行われてきた活動などを考慮し、表現活動を支援する機能を博物館に持たせたいという案であり、表現活動をしてきた人たちの遺作や遺品の保存も重要という指摘がありましたが、美術館的機能を持つことで全体が膨張してしまう危惧があることや他の分野も考慮すると、理念としては掲げないが、これまで同様の方法で柔軟に対応するということが確認されました。

● 博物館の機能と事業について

基本理念から導き出される博物館の機能と事業、施設について審議されました。

学校と博物館との連携については、その難しさが語られましたが、子供たちの受け入れは博物館の生き残りでもあり、地元の学校をいかに巻き込むか、博物館の積極性が問われるとの指摘がありました。博物館は「寄り合いの場」であり、放課後の子供たちを取り込むアイデアも出されました。

● 施設構成の考え方

次年度の基本計画に移る前に、部屋のイメージに対する認識を深めるということで、博物館の機能と活動を、場所と関連付けながらの話し合いがおこなわれました。

建設場所や建物の形が未定のまま、施設を考えることに対する戸惑いの声もありましたが、身近な

自然や暮らしに基づく野外展示、地域の野外フィールドと連携していく方向性などは共通のイメージが得られたと思われます。

また、資料が学芸員の専用物ではない以上、可能な限り市民に公開する工夫をすることが重要だという指摘があり、展示室と関連付けながら収蔵庫資料を見せるアイデアなどが検討されました。

さらに、地域との密接な関係がまだ生きている名護・山原だからこそ、フィールドとつながった活動を重視するべきであり、地域の素材・技術を建築に生かすなどの工夫も検討すべきだという意見がありました。

第3回検討委員会で決定した博物館基本理念

- (1) 名護・やんばるの自然と文化を表現する博物館
- (2) 過去と未来の暮らしを考える博物館
- (3) みんなでつくる博物館
- (4) あつめ・考え・守り育てる博物館
- (5) 名護・やんばるの情報を伝える博物館
- (6) 夢がひろがる博物館

【第4回検討委員会】

日時：平成21年2月20日（金）

午後3時00分～午後7時00分

場所：名護市中央公民館（2階・第4研修室）

参加者：

宜保榮治郎委員長・島袋正敏副委員長・安里進委員・宮城一夫委員・岸本能子委員・千木良芳範委員・仲地暁委員・仲原弘哲委員・前田貴子委員、名護市教育委員会、名護博物館



会議では、作業部会と検討委員会でこれまで出された意見やアイデアを、事務局で整理して作製した「新名護博物館（仮称）基本構想」の素案と、新館建設候補地について検討されました。

● 建設の意義

ここでは、「なぜ博物館が必要なのか」という、博物館建設の意義を確認する検討がおこなわれました。これまでの議論を踏まえながら文章を確認し、細かな修正が加えられました。

（概略）

「名護・やんばるの大きな個性は、山と海に関わるくらしが今も残っていることにあります。厳しい自然に立ち向かってきた人々の知恵と工夫は、私たちが顧みなくなってきたものですが、そこには、現代社会が抱えるさまざまな問題を解決する、多くの可能性があります。そのためにも、名護・やんばるで培われてきた、くらしの中の技や文化を、保存・継承していくことが必要です。博物館活動を通して地域の資産が次世代に受け継がれることは、地域のこれからを明るくものにすることにつながるのです。」

● 建設の目的

ここでは、「博物館は何を担うのか」ということについて、素案の検討がおこなわれました。特に概念図について議論され、博物館を中心にして、地域・教育・産業などが有機的にリンクしていくイメージの視覚化が、今回の検討課題の一つとなりました。

また、村（ムラ）と字、町との関係について、歴史的な立場から重要な指摘があり、地域のくらしに立脚する博物館としての姿勢が改めて確認されました。

（概略）

「豊かな自然と共生してきた“くらし”に重心をおき、地域密着型の活動をこれからも推し進めます。名護市域だけでなく、やんばる全体を視野に入れながら、各地の個性を引き出し、地域の営みの保存、継承、活用を実践していきます。」

● 基本理念

ここでは、前回決定した博物館基本理念の確認がおこなわれました。観光という言葉を入れる案も出されましたが、博物館は人が集まる場所にするという内容は確認されているため、ここではなく、後段に

盛り込むことになりました。

また、奄美地方も視野に入れた「やんばる文化圏」という用語は、「奄美もふくめたやんばるのくらし〜」に変更されました。

その他、「みんなでつくる」ことの意味を問い直し、地域住民との交流が不足しているという指摘もありました。

● 基本テーマ

基本テーマは、博物館活動の展開を具体的にイメージさせるものです。検討委員会では、やんばるの生活と自然をベースに、実績を積み重ねて来た名護博物館の方向性はそのままに、さらにバージョンアップした活動を展開するというイメージで一致しています。基本テーマは「名護・やんばるのくらしと自然」ということで決定しました。

また、名護にゆかりのある程順則や多くの先人たちの表現については、「くらし」から見た歴史の流れの中に、分かりやすく配置することが確認されました。

山から集落を経て海へと続く地域の概念図は、河川を加えた立体的な描き方に変えることが提案され、山原の川の重要性や利活用についても話し合われました。

(概略)

「名護・やんばるで受け継がれてきた知恵や技術、祭祀や伝統行事などは、私たちが依って立つ故郷の原型であり、私たちのくらしが、向かうべき姿でもあるともいえます。新名護博物館（仮称）は、名護・やんばるのくらしと自然のあり方を考え、新たな創造を紡ぎだすことで、まちづくりに貢献することを目指します。」

● 展示について

展示についての検討では、専門分野ごとに分けた展示ではなく、やんばるのくらしを軸に歴史や民俗などの専門を見る、という基本的な展示の方針が再確認されました。

自然を再現したジオラマが、本物の山がすぐそばにある山原のような場所で、本当に必要かどうかについて意見が交わされましたが、細かな検討は次年度の基本計画段階で、時間をかけて行うこととなりました。

● 教育普及について

名護市職員で組織された作業部会の、「稲作や塩づくりなど、実際やっている所に行って体験する」というアイデアが話題になり、実際の畑や工場などを博物館の屋外展示場に指定して、体験学習の場にするなどが提案されました。博物館で出来ないことは、外にいる人や場所と連携して体験することが重要であり、それが、地域の文化資産の掘り起こしにつながるということです。

また、学校教育との連携や、サポート機能を博物館が担うことも検討されました。博物館の教育機能を充実させ、ものやコトを通して子供たちの可能性を引き出すことや、学校における文科系クラブの衰退を補完する意味からも、子供たちが気軽に出入りできる施設となることを望む声が上がりました。

さらに、高齢者の記憶を刺激し、癒しとともに元気づける効果も博物館にあることが実例とともに紹介され、さまざまな人が集まり、ものを通して交流する博物館のイメージが共有されました。

しかし、経済効率を指摘する声も同時に出され、体験学習を中心とした博物館活動と、安定的な集客の確保とのバランスをとることが、大きな課題であると改めて認識されました。

● 博物館建設用地について

現在、名護市で検討されている、8ヶ所の新名護博物館（仮称）建設候補地の説明が担当からあり、各用地の利点と課題に対する答申が検討委員会に求められました。

8ヶ所の候補地は、大きく分けると市街地案・市街地周辺案・フィールド案の3つに分類されます。

市街地案では、中心街の活性化や市民利用などを考慮した方向づけが考えられますが、課題としては駐車場の確保が上げられます。

市街地周辺案では、まとまった広さの用地確保が比較的容易だと思われますが、中心市街からは多少遠いという課題があります。

フィールド案は環境のいい広い野外で、宿泊もできる体験施設のようなものが想像されますが、市街地の利用者が減少することが予測されます。車での移動が不可欠であり、「遠い」ことが集客にどう影響するか、判断が分かれると思われます。

検討委員会では、今後、専門分野から見たそれぞれの候補地の特徴や、周辺に与える影響などを議論し、名護市が決定するための材料を答申することになります。

■ 作業部会名簿

	氏 名	所 属	備 考
1	中本 正泰	参 事	部長
2	中村 彦次	教育委員会・総務課長	副部長
3	石川 達義	教育委員会・社会教育課長	
4	渡具知 武美	教育委員会・学校教育課長	
5	石嶺 康政	教育委員会・教育施設課長	
6	松田 光博	教育委員会・教育施設課主幹	
7	仲村 善文	建設部・建設計画課長	
8	金城 進	産業部・市街地活性化主幹	
9	仲本 太	企画総務部・企画財政課主幹	
10	比嘉 久	教育委員会・文化課係長	
11	比嘉 ひとみ	教育委員会・社会教育課係長	博物館学芸員資格者
12	仲宗根 禎	教育委員会・文化課	博物館学芸員資格者
13	宮城 智浩	教育委員会・文化課	博物館学芸員資格者
14	亀川 彰子	教育委員会・文化課	博物館学芸員資格者
15	比嘉 史	教育委員会・PT	博物館学芸員資格者
16	友寄 凡子	企画総務部・企画財政課	博物館学芸員資格者
17	比嘉 達也	企画総務部・企画財政課	博物館学芸員資格者
18	金城 有吾	産業部・産業建設課	博物館学芸員資格者
19	屋比久 美夏	教育委員会・社会教育課	博物館学芸員資格者
20	伊計 真理	教育委員会・総務課	名護市子ども会知見者
21	大嶺 真人	教育委員会・文化課	歴史

■ 写真記録

●第1回作業部会：平成20年11月28日

施設見学のあと、基本構想策定業務の工程、作業部会の業務内容などを確認。



●第2回作業部会：平成20年12月17日

ワークショップ形式で、基本理念、テーマ、活動、施設イメージなどについて話し合い、キーワード抽出。



●第3回作業部会：平成21年1月20日

博物館の施設、活動などについてワークショップ形式で検討。



●第4回作業部会：平成21年2月10日

施設と活動のイメージをワークショップ形式で整理。
建設候補地の考え方、地域特性などについてキーワードを抽出。



●第5回作業部会：平成21年3月3日

「基本構想素案」の確認。



発行日：2009 年 3 月 31 日
発 行：新名護博物館(仮称)
基本構想策定検討委員会
事務局：名護博物館
〒 905-0021
沖縄県名護市東江 1-8-11
TEL 0980-53-1342
FAX 0980-53-1362